

“1年の計そのままにもう師走”

1年、365日も過ぎ去ってしまったら、本当に短かく感じられるもので、この365日の間には、社会もわたくし達のくらしのうえにも、いろいろなことがあつて、泣いたり笑つたり、恐つたり、時の流に従つて忘却の彼方へと霞んでしまう、そしてあわただしい歳を瀬を迎えたわけである。

1年の計は元旦にありと、この年の年頭に新たな決意で迎えた今年であつたのだが、いつもの年と変りなく毎日の平凡なくり返して、もう師走となつてしまった。

“血圧が昂ぶる家計簿に師走”

物価の上昇は果てしなく私達のくらしを圧迫しつづける。日常のくらしの中の細かい目に見えないような物品が、気の付かないうちにどんどんと騰つてしまつていく。サラリーマンの食昼も、100円のもの110円、80円のソバが90円と、いつの間にか10%以上もハネ上つてしまつていくように、目にはつかないが、大きな値上げの巾となり、積もり積もつて家計を圧迫しているようである。新年を迎えるこの月、家計支出がぼろ張して稼ぎの少ない我が肩がいつそう細る思いである。

“特売、廉売ほんとの 値だんどこいつた”

近ごろの商店街は、いつでも大特売、大廉売で消費者を誘惑しているようだ。朝の新聞と共に配達されるチラシの数々、消費意欲を、これでもかこれでもかとおおる。本当の値だんはどうなつてしまつたのだろうか、こういつまでも安売をしていて、物価上昇の世の中に対抗していくために、そこに何んらかのからくりあるのではないか。歳末ともなれば、この商法ますます激しくなつて、つい乏しい財布のヒモをゆるめてしまうようである。

“倒産のニュース社会は酷しいな”

高度成長下の経済競争において、強者弱肉のこわり弱いものかどどん減び、強いもののみが

生き残つていくのか、人の生きていくことの如何に酷しいことか、年末を迎えるこのごろ企業の倒産が相次ぎ、最高の倒産記録を示したなどの、暗いニュースが社会生活の酷しさを示しているようだ。

“日本にも祭りあろうなクリスマス”

ジングルベルのメロデーが流れはじめると、街はクリスマス一色に彩られる。サンタクロース、ツリーなどが店ごとに飾られ道行く人の消費費気をおおる。近頃クリスマスの行事は年々華やかになる一方、日本本来のお祭はだんだんと忘れられようとしている。何んでもアチラ式の現在だからいたし方もあるまいが、何んとも寂しい限りである。

“ボーナスは良きもの 妻と子の笑顔”

待ちに待つたボーナスの出る師走、今年は史上最高のボーナスが人々の家計をうるおしたそうなる。物価上昇中のボーナスとあつて、直ぐに巻にとび去つてしまうことになるけれど、貧しい私達の家庭の生活補給金としてまことに有難いものであつて、このボーナスによつて一息つけようというもの。家内中あれこれと計画を立てて待つていたボーナス袋を手にとつて家庭での団楽も一きは明るさを増すというものである。

“健やかに今年も 除夜の鐘を聞き”

交通事故激増、物価上昇、沖縄返還、小笠原諸島の日本復帰、首相の訪べ、訪米に伴う学生デモ、英国のポンド切下等等、内外にいろいろな話題を提供した今年もいよいよ今日限りで新しい年を迎えようとする大晦日、大掃除も終り、元旦の祝の準備を整えて静かに除夜の鐘を聞く。家内一同健康で過したことはまことに有難いことである。

いま4つの島に1億の人達が、それぞれの分に應じたくらしの中で、それぞれの感情に浸りながら新年を迎えようとしている。



東南アジア等のいわゆる後進国間において日本製の皮靴が人気を博しているという。輸出品としての日本製品の安かろう、悪かろうの世評の反面こうした大地に根をおろしつつある品目のあることを知り、他国の生活様式あるいは諸般の事情等について認識を深めることにより、まだまだ市場開発の全地のあることが痛感されたのである。印度の数多い最近の民族歌唱のなかにも「足の皮ぐつメードインジャパン、英国じたてのズボンをはいて、真赤な帽子はトルコ製、だけど胸に溢れる赤い血潮は印度の心が流れている。」というのがあることから上述のことがわかる。たとえ、身につけるものは外国製で着飾つても、心には印度人の血が脈々と流れ、この国に生まれたことを誇りに思う。という意味なのだそうである。今様大和民族にはまこと耳の痛い話しである。

さて、こうした国外の日本商品の進出と同時に国内においても企業自身の反省が必要となつてくる。というのは1例とれば最近韓国の繊維製品類の輸出が活発となり、日本製品との競合がめざましいという。つまり日本から毛糸を輸入しセーター等の商品に加工して再輸出するものである。これは、政府の低開発国への時恵供与の対外施策の結果が逆行進化したものであり、国内の当該企

業の深刻な問題となりかねない状況なのである。

こうした経済的変容をよそに私たちの周囲ではショッキングな事件があまりにも多い。外務省職員のスパイ事件をはじめ、街中での卒業を控えた高校生の乱行等、また師走に入つては有史以来の1兆7千億円のボーナスラツシユに加へて、ジングルベルの軽音は未曾有の商店売上高を夢みる。しかし、目覚めての私生活は起きぬけにパンを噛り、人にもまれて通勤する。この通勤電車のラツシユアワーのピーク時では6疊に120人の人間をつめこんだに等しい有様であるという。脈搏は平常の2.5割増しに増加し、この状態に1時間いることは4時間勤務したと同じエネルギーを消耗するという。また年末は酒に接する機会が多く、相当酒に自信のある人でも午後8時以降に深酒すると翌朝にいたつても交通規則に解れる程のアルコール分が呼吸のなかに含有するという。このような状況では勤務にさしつかえるのは当然であり、能率化も何もあつたものではない。そのときどきの正常な判断と理性の維持こそが、私たちの社会、職域倫理の認識の前提となるからである。こおした秩序のなかで希望に満ちた新年をむかへ日本人の血をたぎらせたいものである。

編 集 後 記

今年ももう年の暮れ、街を歩く人々のどの顔を見ても忙がしそうに見える。

「統計茨城」も12月号で無事今年の発行予定を終了する。読者の皆様はすでに新年を迎える準備を完了して、行く年をかえりみ、くる年の思いにひたつていることでしょうか。

ともあれ、しめくくりとして今年の「統計茨城」の反省をして、新年からのたくわえとしたい。

昨年度の隔月刊から本年度は、毎月刊となつたが、ページ数が21ページと半分以下になつた。これは印刷費の値上がり等が大きい上、予算が少ないというピンチに見舞われての結果である。

内容的には4月号より経済指標を新載し、統計課の発表する各種の調査結果と解説を中心にのせて来た。その成果については読者の皆様のご批判によるほかない。しかし、他の小さな記事については、一貫性をかいたことが欠かんであろう。本紙の目的は統計思想の普及向上を目的としたP・Rにあるが、かざられた誌面に巾広い記事を載せているので一貫性に欠けるきらいがあることはやむをえないのかもしれないが……。

しかし、来年からはできるだけ掲載記事についてよく吟味して、読みやすい統計P・R誌してにきたいと思う。

読者の皆様のご批判をいただくと共に、あわせて、広く参考となる原稿をお寄せ下さるよう希望します。